

越後屋で朝風呂。和朝食には三種の神器である、納豆、梅干し、海苔のお供えがあるはずなのに、ここでは納豆がなくて少々寂しい気分。その代わりというべきか、ハム、ベーコンなどが和食に供されました。これが秘境らしさかもしれません。早めに角間温泉郷を出発し、野尻湖を目指しました。



その途中、信濃町の小林一茶(1763-1827)の旧宅を訪ねました。一茶は15歳で俳諧の道に進み、14年ぶりに帰省した時に詠んだ、「門の木も先つつがなし夕涼」の句碑がありました。家は平穩無事、という安堵感が軽やかに述べられています。実際は継母と折り合いが



悪く、再び家を出ました。50歳で帰郷し、やっと弟と平等に屋敷を分けて住むことはできたものの、大火で類焼し、土蔵(間口3間半・奥行2間2尺)で暮らしました。「これがまあ終の栖か雪五尺」と慨嘆しながらも、ユーマアをもって受容しています。晩年に結婚して子供が生まれても次々と死に、悲しみながら、粗末な土蔵で暮らし、65歳で没しました。「露の世は露の世ながらさりながら」と、一茶は悲哀をさりりと詠んでいます。あれほど子ども目線の素朴な、愛情深い句を詠んだのにと、可哀想な気がします。忍耐強さ、しぶとさ、負けず嫌い、弱い者の側に立つなどは、信濃人らしさなのでしょうか。一茶が身近に感じられてきました。辺境の地から、苦節の年月を経て、味わい深い文化が生まれているのは素晴らしいです。

信濃町の東にある野尻湖に向かいました。ナウマンゾウの化石が出たことで有名とのことでした。60万年以上前に生息していたそうですが、ピンときません。学生時代、YWCAのキャンプが素敵な野尻湖で行われるからと誘われましたが、参加できませんでしたので、心の中で、野尻湖のイメージをひとり膨らませておりました。少女時代に「湖畔の小さな家で、揺り椅子に座って、読書する」夢を抱いていたこともありましたが、でも！それ以上に、山爺が野尻湖のほとりを、永遠の栖にしたいという夢を話されたので、どうしても見届ける必要がありました。野尻湖の湖面を吹く風、四季折々に輝きを見せる木々、また密やかに実をつける野の花、にぎやかに歌う小鳥たち、高い、澄んだ空、それらを心に刻み、その一つとなって、共に野尻湖畔に永遠に眠る算段をしておられるのです。私も夢みる乙女でしたが、山爺は夢を実行せんとしています。

野尻湖は遊覧船や貸しボート屋などがあり、釣りやマリンスポーツなどを楽しめるような観光地でした。湖の中の琵琶島に大きい赤い鳥居があるのが、正面から見えたので、すこし興ざめでした。



湖岸は開けているところは少ないので、湖岸を一周するには、木立の中の道を走ります。途中で、山爺は「この辺り」と、腕を出して「永遠の栖」に予定しておられる別荘地の雑木林を指さされました。「え〜っ！」とだ



けしか返答はできませんでした。やがて黒姫山を望める反対側の湖岸にでました。水はきれいで、波もなく、清潔感のある光景が広がっていました。昔の少年たちがラジコン飛行機を飛ばして見せてくれました。老人が嬉々として遊ぶ姿もなかなか可愛いものです。大自然に遊んでもらっているようなものです。野尻湖は素朴で、ほっこり、



地味に人を迎えてくれています。憧れの野尻湖と別れ、黒姫駅前の蕎麦屋が旨い！ということでそこまで行きましたが、あいにく休業日。楽しみは次の機会にも残しておきましょう。それでも蕎麦は食べなくては！烏骨鶏の月見蕎麦を食べました。お別れする前に、愛犬エルフィーに仕込んだ芸を披露してくれました。山爺ご案内の信濃路の旅はとても味わい深いものでした。

